

マルコによる福音書 10:1～12

「頑固な人と自由な神」

2025年5月18日(主の日)

わたしたちは人の目を気にします。自分がやっていること、やったことに後ろ指を刺されないかをいつも気にしている、といってもいいかもしれません。そのために、いろいろな理由付けをします。法律違反ではない、ということは大事なことでしょけれど、法律違反であっても「みんながやっている」とか「だれにも迷惑かけていない」ということも理由にします。正当化や言い訳ばかり考えているうちに、本来何をしたいのか、何をするのが幸せなのかを忘れてしまうのが私達人間なのではないでしょうか。

今、主イエスと弟子たちはエルサレムへと向かっておられます。主イエスご自身ははっきりと、苦しみを受け殺され、その後に復活する、と十字架と復活を見据えての旅です。けれども、群衆が集まってきたので、「主イエスは再びいつものように教えておられた」と記されます。主イエスご自身は覚悟をもってエルサレムへと旅を続けておられますけれど、わたしたちには、その上で、変わらずに暮らしなさい、大事なことは何か、父なる神の御心を求めて過ごしなさい。神の国は近づいたのだから、といつものように教えておられるのではないのでしょうか。

そこでファリサイ派の人が議論を挑みます。この話がここで記されるのは話の流れとしてやや唐突にも思えるかもしれません。けれども、離婚のこと、それは結婚のことでもあるのですけれど、そういう人の生活・人生に関わるある意味いたって普通のことであったこともつながっているのかもしれません。十字架は決定的なことでありながらも、わたしたちはその上でいつものように暮らすのです。逆に言えば、いつもの生活、普段通りの生活の中で十字架を見ているか、が問われるし、そもそもこの生活は主の十字架と復活の上になりたっている、ということでしょう。

ファリサイ派の人々が試そうとして言ったことはこういうことでした。「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と聞きました。これがどうして試すことになるのか、すぐにはピンとこないかもしれません。これまでの律法の議論といえば、安息日に麦をつんで食べてよいか、安息日に病人を癒やしてよいか、などを問い、主イエスがその場で、ファリサイ派の人たち飲目には律法違反と映るような返答をし、あるいは実際に病を癒やす、ということを行なうときにおこっていました。ファリサイ派の人たちは、その返事と行為を冒涇だ、と言って怒り、訴える口実にしました。主イエスがなさったことは、ひとつひとつの律法を、父なる神のみ心にまで立ち返って、どのように考えるのか、どのように行うのか、ということでした。ここでも、返答は律法違反のようなものではありませんでしたが、同じ用に神の御心に立ち返ることを教えておられるのです。

もともと、申命記 24:1 に夫が、妻にはずべきことを見つけ、気に入らなくなったら離婚してよい、追い出してよい、という決まりがありました。そして、——律法によくあるように——この恥ずべきこととはなにか、という議論がなされていたのです。もっともゆ

るい解釈は、もうなんでも、夫が気に入らなければ離婚してもよい、というものでした。朝起きるのが遅い、とかご飯がまずいとか、そんなことでしょうか。最も厳しいものは、まさに妻がほかの男と関係を持った場合のみ、というものです。主イエスは言葉の上のことだけでいえば、「離婚してはならない」とおっしゃったのですから、さらに厳しい法の解釈をなさったわけです。この議論自体は、まったくおかしい話してはありません。主イエスのお応えも律法違反でもなんでもありません。ユダヤ人の中にも同じ考えの人がいたのです。しかし、なんらかの答えを引き出すことで、ゆるい派かきびしい派か、どちらかにつくことになる、結果として一方には受け入れられるけれど、一方には受け入れられなくなるわけです。一般には「ああ、このイエスという先生は、結婚に関して厳しい見解を持っておられるのだな、なんだか窮屈だな」と、ユダヤ人男性の不評を買う、という意味でファリサイ派の人たちの試みは、成功したのかもしれない。

けれども、主イエスがここでおっしゃっていることは、そういうことではありません。主イエスは、離婚していいか、離婚していい条件はなにか、どうやったら離婚を正当化できるか、という人間の問題としての離婚についてではなく、神が二人を結びあわされた神の恵の御業としての結婚について話しておられるのです。まず考えるべきは、結婚が神によって定められたものだ、というところに立ち返る、ということだと主イエスはおっしゃるのです。それなしに律法上の離婚の話などしても意味がないのです。

ファリサイ派の人たちは律法の決まりからものを考えます。ですから「モーセはこう言っています」と答えました。「律法ではこうです」という意味です。けれども、主イエスは、それは離縁の話であって、結婚が何か、ということはそこじゃない、神の御心が何なのかを聖書から聞きなさい、聖書のもっと前の方だ、とおっしゃるわけです。そうして、創世記第2章を主イエスは引用なさいました。創世記 2:18「人は独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう……そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。『ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。／これをこそ、女と呼ぼう／まさに、男から取られたものだから。』」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。神は孤独であった人に、助ける者、パートナーをつくってくださいました。どれほど嬉しかったでしょう。「これこそわたしの骨の骨、肉の肉」と呼べるほどの相手を与えられたのです。イシュとイシャー、少し違いはあるけれど、一緒に生きていくのです。それ以上に大切なことは、神がこのふたりをご覧になって、どれほど喜ばれたかということです。6日間の世界の創造の御業の後神は造られたものをご覧になって「極めて良かった」と思われました。男と女を一つにしたこともこの「極めて良かった」ことの中に会ったに違いありません。「あなたたちはこれから一緒に生きていくんだ。」主イエスはこの神の御心と御業を思い起こして「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」とおっしゃいました。結婚に込められた神の御心を、神の喜びを思い起こしなさい、とおっしゃるのです。結婚そのものが、神様との関係の中でどういう意味を持つかを主イエスはお語りになったのです。人間が男と女であるのは、人は独りで生きるべきものではなく、彼に合う助ける者と向かい合って、助け合いながら共に生きるべきだという神様のみ心によるの

です。そのことが最もはっきりと、端的に実現するのが結婚です。

ある牧師が、自分の結婚のときに司式を牧師頼みにいったら、こんなことを言われた、と教えてくれました。「お二人は、なぜ結婚しようと思ったのですか？」そうすると「好きだからです。」と答えるわけです。そこで牧師は「では、好きでなくなったら別れてしまうのですか？」・・・なかなか厳しいと思いましたけれど、たしかに、結婚というものが人間のものになってしまっている、恋愛の延長くらいにしか考えていない、という現実があるわけです。結婚とは何をする事なのか。会社員時代の同僚で、アイルランド人とインド人のカップルが結婚しました。わたしは後からその話をきいたのですが、その話をしてくれた人が、彼らは2回結婚した、というのです。2回、どういうこと？と思ったら、それぞれの故郷で式をした。アイルランドで、おそらくカトリック教会で式を挙げた、そしてインドでインド式でやった、と。つまり、キリスト教文化圏では、「結婚する」とは結婚式をすることです。結婚するとは式をすることにほかならない。神の前で結婚の誓約をすること、神によって二人が一つに結びあわされることが結婚なのです。そうでなくては結婚とは言わないのです。日本では必ずしもそうと理解されているわけではありません。何をしたら結婚か、日本では戸籍を二人で作れば結婚か、二人で愛を誓えば結婚か、二人で一緒に住めば実質結婚と同じなので、結婚式などいらぬのか。日本では結婚とは何か、ということはこれからますます問われるかもしれません。

結婚は、神様が二人を結び合わせて下さるという神様のみ業である、そこからはじめなくてはならない、と主イエスはおっしゃるのです。だから、「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」のです。主イエスがここで離婚に反対しておられるのは、離婚するとお互いが傷つくからとか、子供が傷つくからとかではありません。「神が結び合わせてくださった」ということを否定し、放棄してしまうことがそこで起るからです。離婚とは、神様が二人を結び合わせて下さったことを否定することに他ならないのです。ですからここに語られているのは、離婚してもよいかいけないか、という決まりについて語られているわけではありません。主イエスは私たちに、結婚を、神が二人を結び合わせて下さったこととして、つまり神様のみ心とみ業によることとして受け止めるようにおっしゃっておられるのです。そこにこそ、二人が本当に一体となり、向かい合って助け合いながら生きるための道があるのです。祝福された家庭を築く秘訣があるのです。「あなたたちは、自分の都合でする離婚をなんとか正統化しようとしているだけではないか、結婚の意義をうしなっているのではないか」、とつきつけられるのです。その上でなお、現代においては、離婚の正当な理由は、相手の不貞だけとは言いきれない現実があります。肉体的、経済的、支配関係などDVと呼ばれるあらゆる種類の暴力があるところに、主イエスは離婚してはならないとおっしゃっている、と主イエスの言葉を律法主義として振り回すことはしてはいけません。それはここで語られる主イエスの思いではないでしょう。結果として、この結婚は間違っていた、あるいは、この先やっていけない、逃げなくてはいけない、ということはあるわけです。しかし、だからこそ、そのような罪によって、それが相手の責任であり、自分ではどうしようもないことであっても、結婚の恵みを失ってしまう現実を、神は悲しまれるのではないのでしょうか。

マタイによる福音書の同じ箇所では、弟子の反応が記されます。「夫婦の間柄がそんなおのなら、妻を迎えない方がましです」。そんな男と女が同じだなんて厳しすぎる、と弟子たちは思ったのです。妻は家に属する財産で、好きにやりとりができるとすら考えられていた時代です。弟子たちもそのような時代の考えから、決して自由ではなかったのです。だから、「結婚がそんなものなら、独身でいた方がましです」といってしまうのです。しかし、主イエスは、この弟子の言葉を逆手にとって、独身の意義を説きます。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。……天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れる事のできる人は受け入れなさい」。ある神学者はこのことについてこう言っています。「キリスト教は、独身の大人を価値ある者と認めた初めての宗教である」古代においては、おおよそどの文化でも、結婚し、こどもを産まなければ価値がないかのようにみなされることが起こっていました。旧約を読むとわかるように、ユダヤ教でもそうだったのです。しかし、それは昔の話ではなく、現代でもそういう部分が、私たちの中にも残っているかもしれません。けれども、主イエスは独身でした。パウロも独身でした。パウロはこの主イエスの言葉よりも、もっと積極的に独身であることを勧めました。主に仕えるためにです。主イエスは30歳を超えても独身でしたが、これはめずらしいことで、そのために、主イエスご自身が「結婚していない」という軽蔑の視線で人から見られていたかもしれません。そのような中で、「独身であることも恵みだ」とおっしゃったのです。

けれども、主イエスは独身でいいんだ、とここで自己弁護なさっているのではありません。あなたたちは今、結婚などしない方がましだ、といったが、結婚することと同じように、結婚しないことも自分で選ぶことではない、それもまた、御心として受け入れることだ、とおっしゃるのです。11節の「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけが受け入れるのである」とおっしゃるこの恵まれた者というのは「与えられた者」という意味です。恵みというのは神から与えられるものだからです。

結婚する道も、そうでない道も、神から与えられる恵みである。「結婚しなければならない」世界に生きていくとするならば、独身でいることを恵みとは思えません。そうではないのです。離婚した人は不完全なのか、そうではないのです。結婚したって完全ではありません。自分に与えられた生き方が、神から与えられた生き方だ、そのことをどうやったら受け入れられるか。神に一つにされたはずの結婚が終わってしまった。そのことをどう受け止めるのか、結婚するにしてもしないにしても、主イエスのみ言葉を受け入れて生きる道が問われるのです。旧約の昔は、神の祝福を受け、神の民が増えることは、子供を作る、子孫を増やすことでした。主イエスが来られてからはそうではなくなりました。血縁ではなくて、水の洗礼によって、主イエスの流された血によって、わたしたちは誰もが父なる神の養子となったのです。誰も血が繋がっていないのです。教会は、洗礼によって神の民として主の体につらなる者とともに歩むのです。